

パリと、いつそ冷たい水を一気に飲み干すような気持ちで書き上げ
てしまうことにした。

正直、もう卒論の思い出を書けと言われてもどんな内容を書いた
のか殆ど忘れてしまっている。覚えていたことと言えど書き終えた
時のなにかしら漠とした空しさのあったことだ。足かけ半年で、ど
うやら霞を食ったように思えた。自分の書いたものが一体論文と呼
べるものか、という不安がそうさせたのである。締め切りよりも一
ヶ月余り早く諦めて結んでしまうと私は事務所の窓口へ提出する頃
合を考えた。早過ぎるのも気恥しいし、また遅すぎるのも困った。
自意識過剰なんだな、と揆ったく思いながら……

卒論の思い出としてはまとまりそうもないが、こうした課題を与
えられたことを契機として、今、円地文子さんのことを考えてみる
と、自分とは随分離れたところにいるな、と感じる。円地文子さん
の作品と人柄に対する心象が一つの固まりになって宙に浮いて見え
る。言ってみるなら、非常に洗練された文化の中で育った円地文子
さんの世界が微妙に彩られながら私の土臭い世界から分離して行く
のである。今のところでは円地文子さんの人と作品は私の憧れでは
なくなっている。実に明確に私に対して異質なものを提示している
興味ある存在である。

このところ仕事の関係で三度ばかり横浜を素通りしている。その
度にいい都会だな、と思う。従兄の言うように下りてみれば浜と名
の付く場所のことであるから、決してそう言い切れないところの方

が多いであろう。けれど、京浜東北の電車の窓から眺める範囲は緑
が比較的多く、建物が多過ぎないのがいい。繁雑でないことが、東
京のどこもかも埋もれた土地を見慣れた目に一息つがせる。

仕事の行く先は磯子の先である。埋め立て地が広がっている。プ
ルドーザーやトラックが走っている。未開ということはいいいことだ
なと思う。仕事の帰路、気の好い訪問先の会社の人に送ってもら
う。丁度日没に出会った。柵に囲まれた広い土地に掘建小屋が一軒
建っている。赤くそまつた清々しいあばら屋である。

〈森 鷗 外 論〉

——『舞姫』における〈恨み〉の内実をめぐって——

第四回卒業 中村 真理子

「卒業論文の思い出」という内容で何か書いて欲しいという手紙
が舞いこんだのは、十一月も半ばの頃であった。「卒論」この言葉
に、一年前の自分がふっともどったようななつかしさを感じた。小
学校の教師として八カ月、一年生担任としてただ無我夢中で一日一
日を送ってきた私にとって、現実から遠く隔たってしまった思い出
の一コマである。

思えば去年の今頃は、書けない書けないとあせっていた頃であっ
た。刻一刻と近づいてくる提出期限にただ心のみはやるばかりであ
った。

山崎先生の何もかを得んと模索している魅力にひかれてゼミに
飛びこみ、鵬外の自己の内面における銷しきれない青春の恨みの中
に、先生自身の青春の痛みをだぶらせて見つめる姿に私自身も知ら

ず知らずのうちに同化していった。そこにおいて、私が作品を分析し、主人公、更に作者に対した時、自分と同次元における生き方の問題としてとらえてしまった。小説を人生の再現として、自己との葛藤においてとらえようとしたのである。この方法は一読者として、言いたい事を言っている時は、極めて明確におもしろい分析ができる。しかし、これがいざ卒論の方法にと持ってきた時、自分のすべての半生及び人生観を語り尽くさねば、作品、作家を解釈しきれないという自分の方法がおそまつに感じられた。自分自身をピエロにして人前にさらすのが愚かしく思われ、自分がいとおしくなってしまうのである。基本的姿勢が、四年になって疑問になりだしたらもういけない。とても落着いて、資料集めなどできるものではない。更に題が悪い。

森鷗外論―『舞姫』における「恨み」の内実をめぐって―どうもこの「恨み」という物は、いやらしいもので、豊太郎の相沢を憎む心―豊太郎の非人間的な自己の行為に対する恨み―作者が官僚機構の中にひたりきれない心の痛みとたどっていくと、更に自分自身へとはね返ってしまうのである。この「恨み」を鷗外の文学とのかわり合いの原点にすると、その「恨み」の持つ根深さ、大きさに、作品と共に私自身が揺れてしまったのである。

結局、卒論をこんな形でしか書けなかったという自分自身の半生に対する「恨み」を残して卒論が存在してしまった。私の青春が中途半端であったように、我が卒論も、銷しきれないものを残して存在してしまつたのである。

文学を模索するというのは、怖ろしいことである。

〈新美南吉の童話の世界〉

第四回卒業 屋辺 葉子

振り返ってみると一年前の今頃は、下書きをまとめ丁度清書の段階に入ろうとした時ではないかと思う。私事になるが、私は昨年の十一月十八日に急性盲腸炎になり、十八日間も入院した。十一月になつても卒論の方が少しも捗らぬおらず、その上、病院生活で、ベッドの上で気持ちはあせってイライラするばかり、「その本人にしかわからない」とよく人が何かの折りにつけて言う言葉が、この時こそびったりとあてはまったと言つても良いと思う位、勉強のことで冷汗をかいたことも少ない。卒論に関する思い出と聞かれただらず、何よりも最初にこのことが頭に浮かんできつてしまう。

卒論自体のことでは、苦勞したという印象が一番強い。というのは、自分の勉強したいものがある程度の方針を決め、三年のゼミから復習すれば卒論を書くにしても比較的楽であると思うが、私は全く関係のないジャンルを取り扱つたのである。童話がすきであるという理由から児童文学を選び、誰にしようなどと迷いながら作家と作品を決めたのが四月をすぎて大変遅かつた。それに、児童文学と一口で言つてもジャンルは広いし、又私の選んだ新美南吉は若くして亡くなつた作家で、死後少しづつ知られる様になつた人でもあつたので、文献や研究者が少なく参考になるものがあまりなくて困つた。このようなことばかり書いていると卒論に関して全く良いことがなかつたように思われるが、しかし、今になって考えてみると卒